10.　原発性肺癌における全身骨シンチグラム

向田　邦俊　　宮庄　英明
上綱　昭光　　三島　康弘
（広島大・2内）
佐々木正博　　山下　征紀
勝田　静知　　小山　　矩
（同・放）
福原　典昭
（国療広島）

昭昭53年1月より昭和54年6月までの1年6カ月にわれわれが経験した原発性肺癌56例につき，骨転移巣の検索を目的として初回骨シンチグラフィー施行時を中心にその臨床像を検討した．肺癌56例の内訳は，腺癌25例・扁平上皮癌23例・小細胞癌8例である．肺癌56例中初回骨シンチグラムで23例(41.1%)に骨転移を認めた．骨X-Pで骨転移を認めたものは12例(21.4%)であった．骨転移部位は肋骨に最も多くみられ62.5%であり，以下腰椎50%，胸椎37.5%，骨盤29.2%の順であった．組織型別の骨転移頻度は腺癌48%，扁平上皮癌43.5%，小細胞癌25%であった．TNM分類による臨床病期別ではI期40%，II期22.2%，III期48.6%であった．骨転移と血清Al-P値および血清CEA値との関係をみると，双方とも骨転移を認める症例に高値を示す傾向がうかがわれた．

11.　肺門リンパ節シンチグラフィーについて

野井　憲治　　沖田　　功
中西　　敬　　小林　光昭
橋本　紘行　　楠元志都生
根木みゆき
（山口大・放）
宇津見博基　　稲葉　伸生
山田　典将
（同・放部）
末冨　一臣　　永野己喜雄
（下関中央・放）

今回われわれは，基礎実験として成熟家兎を用いて経気管支的に^{198}Au Colloidを注入し，シンチグラフィーによる肺門リンパ節の抽出を試みた．

気管支内滴下群は12例中7例(58%)，気管支壁局注群では13例中10例(77%)に気管分岐部リンパ節の描出がみられ，局注群の方が描出率が高かった。単位重量当たりの組織別放射能量の測定でも，剔出リンパ節のCPMは分岐部が最も高値を示した．ついで臨床的応用を試みた．検査対象は当科で診断，治療を行なった12例である．局注1〜3日後のシンチグラム像を分類すると，次のようであった．1) 注入部位に留まって拡散しているもの4例，2) 鎖骨上窩の描出されているもの4例，2) 縦隔のリンパ節と思われるもの3例，4) 肺門のリンパ節と思われるもの3例，5) 気管分岐部リンパ節と考えられるもの4例，以上のように描出し得た．疾患ならびに病態により，リンパ節の描出部位に差異を認めるようである．今後症例を重ねて臨床的意義について明らかにしていきたい．

Presented by Medical*Online